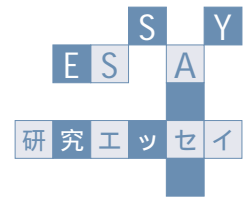




非文字資料としての景観

八久保 厚志 (神奈川大学外国語学部・助教授)



1 文字資料と非文字資料

文字資料と非文字資料をあえてその性格の異なりを考えると、非文字資料は文字のない時代、文字のない地域において人類活動の痕跡をとらえることができる様々なものや身体動作、言葉等々といった人間そのものから発生したものとその環境と考えることになるのであろうか。それならば、景観は、人間活動や自然的変遷によって創りだされ、また作り替えられる資料として、非文字資料としての地位が与えられるのかもしれない。「景観」が文明史解明の資料としてみなされてきたことは、例えば先史時代でも壁画や絵文字等々によって、当時の景観が記録され、絵画、図絵、映像などで伝えられてきたことで示されている。また、文字が生み出され一般化した時代や地域でも同様である。ただ当然なことだが景観は自らを語ることはない。人が感じ、読みとらねばならない。ここに景観が非文字資料として位置づけられるかどうかの大きな課題がある。さらに以下のような技術的な課題も抱えている。

2 景観の資料化

まず、写真1はどこの景観であろうか？キャプションはこの問いのためにあえて付けていない。注目してほしい

ことは、まず建築様式。矢印1に示されているのはこの地域を代表してきた様式であり、矢印2に示しているのは1より新しい様式である。つぎに屋根の上に置かれた球状のもの(矢印3)。実は白黒写真でわからないが、建築物の色である。

答え。沖縄県那覇市首里城からみた北西方向の景観である。矢印1は琉球様式の民家。その特徴は木材建築で琉球赤瓦が屋根に乗せられている。写真ではわからないがシーサーが乗せられることが一般的である。矢印2は第二次世界大戦後、復興のためにアメリカ駐留軍が持ち込んだコンクリートブロックを使った組積造建築物。¹現在はコンクリートブロックばかりでなく、RC造建築物²が増えている。その特徴は、屋根がフラットであり、ルーフバルコニーやピロティを備えた建物が多いことである。さて、矢印3の物体は貯水用タンクである。戦後のアメリカ占領から本土復帰が叶った1970年代後半から80年代初頭、沖縄本島は恒常的な水不足に見舞われた。そのため一般住宅においても、自家用の貯水タンクの設置が一般化し、かつ、本島のみならず離島部においても貯水タンクが普及していったのである。

ここで次の問い。この写真を例えば韓国の南部もしくは台湾の景観と感じられた方。何故、そう感じられたか

写真1



についてひとこと。アメリカは、沖縄と同様コンクリートブロック製造機を戦後彼の地に持ち込んだのである。韓国南部は長らく森林資源の乱獲により禿げ山化しており、建築資材として木材供給が間に合わなかったことが沖縄と共通している。台湾の場合も同様であり、かつ台風等の気候条件も似かよっている。

このように記録された景観としての写真(非文字資料)は自然条件、国際関係、民俗等々様々な要素によって構成されているのであるが、それを分析するには文字によって記録された資料が重要である。ただ、この点について、人の記憶が鮮明なときには文字資料によらなくても伝達や記録が可能であることもまた事実であろう。

次に写真2と3。この景観は沖縄県宮古島から来間島へ架けられた来間大橋である。写真2は橋の中期から宮古島を撮影したもの。写真3は来間島の展望台から橋の全景を撮影したものである。しかし、同じ橋という根拠は撮影者しか示せない。つまり、この景観をみた人が同じ場所の角度違いであるとの判断はできないのである。しかし、この写真は、植生、地形、雲量等々は同じ時期、

同じ場所であることを類推させる要素を秘めている。

3 資料としての課題

以上のように、景観の資料化には時間(変化)は伝わるが、記録媒体によっては色が伝わらない、空気が伝わらない等々の課題がある。景観を資料化していくには、これまで図像、絵画、写真、映像、ホログラムへと2次元から3次元へと高度化してきた。今後は、荒唐無稽なアイデアと思うが、4次元的な、つまり時間軸を取り込むことや、香りなどの記録ができる記録媒体やソフトウェアが必要となつてこよう。景観は観察者やそこに住む人々にとって同時にみることが出来る。その時、視覚、色、香り、空気も体験することができる。景観を非文字資料として体系化していくことにとって、新しい記録媒体を如何に開発してゆくかも重要であろう。

- 1 組積造建築物：石、煉瓦、コンクリートブロック等を積み上げた建築様式。
- 2 RC造建築物：レディミクスコンクリート(生コン)を型枠に流し込んで成形する建築様式。

写真2



写真3

